



「最果てのパラディン」  
特別書き下ろしショートストーリー

## 『戦士的一天』

「やッ！」

鋭い声とともに間合いを詰め、僕は戦槌メイスイを模した棍棒こんぼうを振り上げる。

「らアッ！」

骸骨スケルトンのブラッドが、それを鋭い盾捌さばきで弾はじく。

双方ともに、武器は棍棒と盾。

十四歳の春——僕は今、神殿の丘の麓で、戦槌メイスイでの模擬戦の真っ最中だ。

「はっはア！」

「——っ！」

叩たたきこまれたブラッドの強烈な一撃をこちらも盾でいなし、牽制けんせいの一撃を返しながら間合いをとる。

普段は剣とか槍やりを使うことが多いけれど、基本的にブラッドはおよそ武器といえるものについては、おおよその取り扱いに習熟している。だから僕も戦槌メイスイ、バトルアックス、シミター、スタッフ、フレイル、ナツクルダスター、曲刀、棍、穀竿、鉄拳、果ては作れるからということで、石片マクアを埋めた木剣や投げ棍棒ブーメランまで訓練を受けた。

流石さすがに専門に訓練した戦士ほどじゃないけれど、どういう武器を握つても、一応まったく使えないということはない状態だ。

まさか前世で漫画でしか見たことがないような武器を、これだけ多く、きちんと扱えるようになるとは思ひもしなかった。

「……………」

「……………」

さて。目まぐるしい攻防が落ち着いて。

距離を取ると、一転して、にらみ合いだ。

間合いを測り、ギリギリと摺り足で距離を詰める。

肩の動きや目線で軽くフェイントを入れたりするけれど、ブラッドはなかなか動じない。

僅かに隙もある気がするけれど、あれは絶対に誘いの罠だ。

ここは――

「はッ！」

誘いの隙を突くと見せて、身を翻して大振りの薙ぎ込み。

叩きつけた戦槌はしかしブラッドの戦槌に弾かれ、

「いい動きだ！」

「ぐっ！」

盾で強烈にぶん殴られた。

なんとかこちらも盾で受けるけれど、衝撃に一瞬ふらついたところに一気に間を詰められ、足をひっかけられて――

「――っ!？」

天地が逆さになり、いきなり青空が見えたと思った瞬間、盾で体を地面に押し付けられた。

……盾というのは、単に攻撃を受け止めるための道具ではない。

面をぶつけることもできるし、金属の縁で殴ることもできる。

あるいは広い板であることを利用して、相手の体を抑えこんだりすることにも使える。

武器を持つ手の肘から肩、胸あたりまでをまとめて盾に押さえられてしまうと、状況によってはそれだけでほぼ詰んでしまうこともある。

……盾というのは、攻防一体の道具なのだ。

「ウイル、お前はもうちょっと盾の扱いに慣れたほうがいいな。盾は

いいぞお！」

「うぐぐ……」

なんとか暴れようとするけれど、

「そして、鍛えぬかれた筋力による暴力はもつといい、つと」

ブラッドの怪力で押し込まれてはもうどうしようもない。

ばしばし地面を叩いて降参の動作をすると、ブラッドはふんぞり返って勝ち誇ってみせた。

——くそう！



それから更に数戦ほど模擬戦を繰り返し、勝ったり負けたりした。

……ブラッドはとても器用だ。

相手に合わせて適度に下手な動きをするとか、これはこれで難しいはずなのにあつきりこなす。

更に——

「で、復習だが、まずこれが西方流な。構えて走り回る前提の戦場殺法だ」

「うん」

ブラッドは盾を構え、メイスの柄を顔の横に構えた。

「ヴォールト神官戦士団の教範ではこう構えて、反撃を重視する。盾の壁を築いたり、複数人での戦列構成にも向く」

ブラッドはより低い重心で構え、メイスを体の後ろに隠すように構えた。

「北方、氷の山脈の戦士は西方流に近いが、より高く構えて猛烈な雄叫びとともに打ち掛かる」

「それはどういう合理性があるの？」

「寒い場所じゃ基本、生き物ってのはデカくなるんだよ。北の魔獣やら悪神の眷属けんぞくはおしなべて大柄だ、対応するあっちの戦士は先制と一撃の威力を重視する」

「なるほど」

たしかベルクマンの法則だっけ。

寒い地域では放熱を抑えるために、体重当たりの体表面積が小さくなるよう生き物は適応進化するのだ。

「西方流はじっくり構えて下段集中。神官戦士流は迂闊うかつに仕掛けず小さく刻んで反撃釣り出して崩せ。北方戦士には半端に対応すんな、速攻か徹底防戦で手早く肚はら決めろ」

「了解」

それからそれらの戦士の動きを模した模擬戦を、更に数回行った。

術理もなにも違う流派の動きを、それぞれそれなりのレベルで模倣して鍛錬相手をつとめてみせる。

……ブラッドは、本当に器用だ。

「すごいよね、ブラッドは」

「あん？」

一通り鍛錬が終わり、おしまいの挨拶をしたあとで、僕は思わずそうつぶやいていた。

「引き出しがホントに多い」

「まあ、戦い続きの人生だったからなあ……」

と、ブラッドはどこか遠くを見るように、眼窩がんかの鬼火を揺らめかせた。

「正統派の達人から実戦派の妙手、イカれた奇技の手練まで、色々見てきたもんだ」

そういう話を、僕は何度も聞いていた。

武勇伝をねだると、ブラッドはいつも生前に出会い、戦った使い手たちのことを、本当に嬉し<sup>うれ</sup>そうに、誇らしそうに褒めながら、彼らの一手一手を語る。

勝った相手も、負けた相手も、引き分けた相手も——そして、殺すことになってしまった相手のことも。

……それが、戦士の生き方というものなのだそうだ。

いつか敗れて倒れ死した時、相手が生涯の誇りとして語る武勇伝のひとつとなる。

そうして戦士は永遠になるのだと、ブラッドは語る。

「……そういえば」

ふと、疑問が湧き上がった。

「ブラッドは、どうして戦士になったの？」

「どうして？」

ブラッドはその問いに、怪訝<sup>けげん</sup>そうに首を傾げ——

「いや、考えたこともなかったな」

と、あっさりと答えた。

「えー……？」

「それがなあ。俺あ、別に決断して戦士になったわけじゃねえんだ」  
肩をすくめるブラッド。

神殿への帰り道を歩きながら、彼は呑気<sup>のんき</sup>な調子でそう言った。

「……荒涼とした、だだっぴろい峡谷の生まれでなあ。健康な男児はみな狩人<sup>かりゆうど</sup>にして戦士になる、そういう場所だった」

「……………」

「傭兵になって、街に出て、他の生き方もあるとは知ったが、戦士の生き方が芯から性に合ってたからな。俺はそういう生き物だと思っ

て、悩みもしなかった」

「——それで、後悔しなかった？」

「おう、別にしなかった」

さっぱりとしたものだつた。

凄<sup>すこ</sup>い生き方だ——

「けど、そうだな。ウィル。……お前は後悔するかもしれねえな」

「へ？」

ブラッドはいつもの歩調で前に歩く。

先をゆくその背中が、いつも通りのものだ。

「武勇つてのは、理不尽を叩き潰す力でもあるが、時には呪いにもなる」

「のろ、い……」

「いつそ無力なら諦め逃げを打てたものが、力があるからこそ諦められないこともある。それが逃れ得ぬ死を招くこともな」

「……………」

「ウィル。戦い方をお前に仕込んだのは、俺のワガママだ。……そうなつたら、恨んでもいいぜ」

「……………」

その言い方は、さっぱりしたものだったけれど。

「ブラッド」

僕は立ち止まって、呼びかけた。

「ん？」

ブラッドも立ち止まって、振り返る。

「——僕は絶対、ブラッドを恨んだりしないよ」

僕はブラッドが、どういふつもりで僕に力を授けてくれたのか、わかつている。

わかつているつもりだ。

だから絶対に、後悔することがあっても、恨んだりはいしない。

……眼窩の鬼火を見つめて、まっすぐにそう言った。

「そうか。……そうか」

ブラッドはそう言うのと、再び振り向いて歩き出した。

神殿はもう、すぐそこだ。

ふわりと、なんだかいい匂いがする。

「今日の晩飯はなんだろうなあ」

「あー、多分、この匂いは――」

他愛無い会話を交わしながら。

僕たちはいつも通りに、神殿いえに向かって歩き続けた。